

幻魔大戦 10

超能力戦争

平井和正



げん ま たいせん
幻魔大戦 10

ひら い かずまさ
平井和正



角川文庫 4869

昭和五十六年三月二十日 初版発行
昭和五十八年四月 日 九版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一一(大代表)

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-138324-0946 (○)

幻魔大戦 10

超能力戦争

平井和正



角川文庫 4869

イラスト 生頼範義

一九六八年正月――

杉村由紀すぎむらゆきの幻視は依然として続いている。昼夜を分たず、幻視は突如として彼女に襲いかかり、正常な視界を奪ってしまふ。決して長くは続かない。たいていはほんの数秒であり、長くても五分、十分と持続することはない。

それは夢癡のある人間が、ふつと精神に生じる空間を夢想をもって埋める日常的な性癖に酷似していた。他人と話しているさい中でもその現象はやって来る。適当に受け答えてはいるが、由紀の意識は現実にはなく、幻視に集中しているのである。

勘のいい人間には見破られてしまふが、幸い短時間なので、多少ぼうつとしていると思われるだけですんでいた。しかし、意識は完全に別世界へ入りこんでしまっている。

なぜ、そんな奇矯ききょうさの虜とりこになつてしまつたのか。由紀には理由がわかつてゐる。もともと自分は超常感覚を持ち合わせており、この現実というものが一枚岩のように確固不動の存在ではないと知っていたせいもある。

超感覚者にとつての現実とは重層的なものであり、物質的現象との間には不可視の超常現象がはさまっている。幻視を行なつてゐる当人にとり、現実是非常に曖昧あいまいな不安定なものと化す。時

間軸をはずしてしまった時、彼女には視えているものが現実、非現実の区分を失ってしまふ。非現実とわかっていても、それが過去の姿を見せているのか、あるいは未来透視を行なっているのか、判然としないのである。一見、でたらめで無秩序だからといって、まったく無意味であるとは限らないのだ。

炎の中にいる三千子^{みちこ}の姿を幻視したショックだけではない。杉村由紀の精神にショックをもたらし、現実の時間空間座標からわずかにずれを生じさせる原因となったのに、東丈^{あずまじょう}の失踪^{しっそう}があった。

失踪といっても、長期にわたるものではない。あの大晦日の夜、木村市枝^{きむらいちえ}を送って家を出た丈は、すぐに帰るといいながら、そのまま帰ってこなかった。元旦は遂に姿を見せず、次の夜になってようやく戻ってきた。ごく短時間の失踪だったが、杉村由紀に衝撃を与えるのに充分であった。

丈は記憶が定かでないというだけで、多くを語らなかつた。ひどく疲労していて、ぼうつとなつてゐるようだった。“神隠し”に遭つたのではないか、と三千子はひそかに杉村由紀に漏らした。

丈がいうにはいつの間にか、雪の深い山中に自分がいるのを発見し、そのまま一日をすごしたのだそうである。いろいろ考えることもあり、心を整理するのにちようどよかった、と彼は簡潔に述べた。

「祈っていたんだ……」

と、丈はいった。一昼夜、飲まず食わずですごしたため、疲れてはいるが、顔は雪焼けで浅黒くなっていた。結局、どこの山中だったかわからずじまいだったようである。

祈っていたというのは、いうまでもなく井沢郁江いざわいくえのためであろう。そこまで丈が追い詰められている心境を察して、由紀は胸が痛んだ。さすがの丈も他にどうするすべもなくなつたのである。

丈はさらにやつれ、寡黙になつて戻ってきた。彼が努力を重ねるほどに、障害は更に険しさを増し、苦しみを増していくとはどうしたことか、と杉村由紀は疑わずにいられた。要求される努力は果てしもなく、しかも報いられるものはあまりにも少ない。

郁江を救おうとするほどに、丈の前に立ちちはだかる困難は巨大化するようであつた。しかし、丈の性格からいって逃げをうったり、断念したりすることは決してあるまいと思えた。命をすり減らしても、あくまでも努力を払い続けようとするだろう。

しかも、丈を足止めさせようとする困難は郁江の問題のみに限られたわけではない。いつせいに上った火の手を幻視している由紀にとり、容易ならぬ事態が待ち受けていることは明らかであつた。とりわけ炎の中に幻視した三千子の姿は絶対に口外できないものだった。

加うるにそれにくく丈の失踪は、彼女に堪えがたい心労の過負荷を負わせたのかもしれない。由紀は現実と幻視の間隙に陥ちこんでしまったようになり、回復しなかった。重い風邪を引きこ

んだ時、耳がツンボになり聴覚異常が生じるのに似ていた。現実が虚ろに遠方へ遠ざかってしまふ感覚である。

正月の二日に丈は戻ってきたものの、振舞いに変化が認められた。すぐに単身で姿を消してしまふのである。しばらくすると舞い戻ってはくるが、これまでのように秘書に所在を明らかにしておく習慣は崩れ去っていた。一時的な変化かもしれないが、丈と杉村由紀の間には意志疎通がこれまでのようにうまく行かなくなっていた。由紀自体、口外できない秘密を抱えこんでしまったためかもしれない。

双方ともに隔意や遠慮が生じたというほどではないのだが、多少ぎくしゃくした間になったのは否めない事実であった。由紀は、遠感者でこそないが鋭敏な勘の持主である丈に、己れの幻視を感じられることを恐れていた。

それが由紀の態度を不自然にしていることは明白なのだが、幸い丈は気付かないようだった。己れの抱えこんだ問題で手いっぱいであり、そこまで気が廻らないのであろう。

渋谷事務所一階の執務室に姿を見せても、丈はすぐに姿を消してしまう。七階へ出かけたのではなく、外出してしまうのである。失踪とまではいれないが、事務所に落着きこんでいる心境ではないらしい。

由紀としては問い質すこともできなかった。幸い松がとれないうちは、丈が事務所をあけていても支障を来すことはなさそうだった。面会の予約は五日から入っているが、まだ多少の余裕は

ある。

幻視感覚に心をゆだねている限り、丈との間に生じた隔りを絶えず意識せずにすむということもあって、由紀は自己逃避を行なっていたのかもしれない。悩みが消えてしまいうわけではないが、麻酔薬がきいたように、疼痛が鈍くなり、意識の表層から遠のいていくことがわかる。

もし、幻視を中止すれば、一切の現実はずかさず立ち返ってくる。炎の中に視た三千子の幻視、丈に生じている奇矯な振舞いの全てと対決しなければならぬ。

秘書室の平山圭子たちも、丈の変化は感じているのだが、口に出せずにいるようであった。丈がどれほどの苦衷にさいなまれているか、彼女たちには知る機会がない。知っていたとしても、彼の苦しみをやわらげるための方法はなにもない。なすすべもないのである。

女優から電話がかかってきたのは、そんな時であった。まだ三か日もあけていなかった。

「よかった、事務所が開いていて！」

と、女優は安堵の声を出した。事務所は元日から開いていて、正月休みなど関係ないのだが、そんなことは知らなかったたのであろう。

「先生いらっしゃる？　すぐお会いしたいんだけど」

例によって、相手の都合などものもしない調子だった。新年の挨拶すら口にしない。身勝手なのはわかっているが、気が急いでいるのであろう。

「先生は今外出しておりますが……ご用件をお承りして、伝えましょうか？」

「いいえ。直接お遭いして話したいの。どうしてもお遭いしたいんですけど、連絡つかないかしら？」

強引で一方的なものいいだが、切迫したものが感じられた。杉村由紀は決してこの女優に好感は持っていない。以前の由紀であれば、しっぺ返しの対象にしたかもしれない。女性的な悪意や意地悪を喚起させる相手であった。

「申しわけございませんが、出先がわかりませんので、連絡がつきかねます」

「だってあなた秘書でしょ。秘書なのに、主人の出先がわからないなんておかしいじゃないの。そんなことじゃ秘書は務まらないんじゃない」

「申しわけございません。連絡がつかしましたら伝えますので……」

由紀は腹も立たなかった。特殊な遊離した精神状態にあるせいかもしれないなかった。相手の高圧的、理不尽な態度がかえって哀れに感じられた。由紀も女だから、時として感情的になることもあるのだが、丈の下に来てからは、あまり怒らなくなったようだ。

「ちよつとあんた、そんな無責任なことってある?」

女優の声音が鋭く甲高かんたかくなった。あてがはずれて腹が立ってきたのだろう。思い通りにならないと簡単に逆上してしまうのだ。気位ばかり高くても、子供っぽいのは隠しようがなかった。

「申しわけございません。でも、先生の首に縄なまをつけておくこともできかねますので。いつ戻るかわかりませんが、ご用件だけはしっかりお伝えいたします……」

「ねえ、そんなに意地悪しないでよ……」

さすがにまずいと思っただのか、女優はトーン・ダウンした。

「どうしても大至急先生にお目にかからなくちゃならないのよ。お願いだから意地悪しないでくれない？ あたし本当に困ってるんだから……先生の立ち廻り先、なんとか見当だけでもつかないかしら？」

勝手に困れ、といったかったが、由紀は意地悪そうに笑うだけで我慢した。暮れに丈と遭った女優が、どんなに思うさま侮辱的言辞を弄したか、本人はけろりと忘れてしまったらしい。それとも女優にとっては、感情のおもむくままに振舞うのを特権と信じこんでいるのかもしれない。た。

「申しわけございませんが……」

「それ、やめてくれない。その決まり文句聞くと頭がカリカリしてくるから……どうしても先生に遭わなきゃならないのよ。さっきからこんなにいつているのに、どうしてもわかってくれないの?！」

「なにぶん先生はたいへんど多忙なものですから……別に意地悪を申し上げているつもりはありませんのですが、もしあなたが事務所においていれば、その実情がよくわかりになると思います」

杉村由紀は、多少知能の低い人に告げるような神経を使っていた。女優には理も非もないら

しい。それでも務まるような特殊な職業なのだろうか。売れっ子の有名女優の増上慢で、世の中のことは何でも思い通りになると錯覚しているのかもしれない。

「いいわ、あたし、そっちの事務所へ行つて先生をお待ちするわ。それならいいんでしょう?! まったくもう親切心がないんだから!」

杉村由紀がそれは困ります、と口にする前に、送受器を叩きつける激しい音とともに電話が切れてしまった。

2

「大変。『クレイジー・キャット』がこれから事務所へ押しかけてくるわよ」と、杉村由紀は秘書室の女の子たちに向つて告げた。

「えっ、またあの女が?!」

「クレイジー・キャット」というのは、事務所で女優についた仇名あだなである。猫ねこに似た顔立ちをしているので、ぴったりと定評ができてゐる。猛りたつて狂いまわるといふ印象がよほど強烈だったのであろう。ハナ肇はなはつ率いる同名のコミック・バンドとは関係がない。

「だって、彼女いったい何をしに来るんですか?」

と、平山圭子が尋ねた。

「この前はあんなに怒つて、先生に失礼なことばかりいつて帰つたのに」

「二度と来られる義理じゃないんだけど」

野沢緑のざわみどりという秘書見習がいった。その時は居合わせなかったが、話を聞いて憤慨していたのであろう。目の大きな痩せた娘である。蚊とんぼのように体が細くスマートだ。

「どうするんですか？ もちろん追い返しちゃうんでしょう？」

「一応、話だけは聞いてみるわ」

と、由紀はいった。

「そんな！ 事務所に居座いすわっちゃったら、どうするんですか?!

「だって先生はお留守中なのに」

二人の若い娘はいつせいに非難の合唱をあげた。驕慢きようまんな女優への反感は激しいようである。

「先生がお帰りになった時、あんな女ひとが事務所で待っていたら、気分が悪いんじゃないですか？」

と、野沢緑がはっきりといった。齒に衣着せない所は、前任者の井沢郁江によく似ている。しかし、郁江ほど屈折していず、万事ははっきりした少女だ。くっきりした目鼻立ちが浅黒い膚によく合っている。体つきも動作も少年じみていて活発である。

「面会の予約はないんですから、追い返しちゃうべきです」

「野沢さんははっきりしてるわね」

と、杉村由紀が笑う。圭子はおっとりしており、緑は積極果敢で、二人の娘は対称的である。

「だって、何様かというほど思い上っているんですもの。杉村さん、もったときっぱりと断わってやればよかったのに。あたし、門前払いくわしてやりましょうか？」

「いいわ。一応遭って話を聞いてみるから。先生もあの女優さんはまた必ず来るとおっしゃってたし……七階へ来てもらって遭うからそれならいいでしょ」

「七階ならいいです」

と、野沢緑が威張って許可した。

「でも、空^{から}っ茶だけで帰してやって下さい」

「野沢さんは厳しいわね。七階へ行って、応接室が空いてるかどうか見てくるわ」

由紀は椅子から立上った。タイトスカートのよく似合う彼女を、二人の娘は尊敬と讃美の目で見てゐる。杉村由紀が超能力者であることはいつの間にか、みなの間に分れ渡ってしまっていた。今や由紀は丈の次に崇拜の対象となっているようであった。もはや嫉妬^{しつと}したり、張り合ってみたりしてもはじまらないのだ。

「あたしもちよっと七階まで行きます」

野沢緑は由紀についてきた。

「杉村さん！」

と、明るい声がした。背の高い少年が翳^{かげ}のない笑いを見せてエレベーターの前に立っている。
高鳥^{たかどり}だった。

「今日は先生はお留守でしょう？」

と、少年が尋ねた。

「あら、どうして？」

由紀はこの屈託のない長身の少年が嫌いでない。めげない性格で、入会受付停止中にもかかわらず、GENKENに入りこんでしまった実行力には感心している。高鳥がいるだけで、その場の雰囲気ふんいきが明るくなる。だれにでも好かれる人徳の持主なのであろう。

だれかれなく人気を集めているが、丈だけは高鳥に対して妙に素気ない。

高鳥が接近しようと試みるのを意識的に避けているようである。合性のせいかもしれないが、高鳥の方は一向に気にしていないようである。

丈が何を考えているのか、由紀にも捕捉ほそとしがたい。いかに遠感者テレパスリストでも、丈の思考の奥へまで踏み入るのは禁忌に等しい遠慮がある。丈が伝達することを欲していない想念についても同じことだ。

「どうして先生がお留守だとわかるの？」

「そこが超能力ですよ。透視してみたんです……」

と、高鳥はけろりとしていった。

「建物の外からだって、ちゃんとわかります。先生の波動は凄いですからね。俺に打たれるくらいショックがありますよ」

「残念でした。先生はちゃんと一階にいらっしゃるわ」と、由紀が高鳥に負けず平然としていい返した。

「あれっ、そうかな？ まあいいや、僕はどうせ透視は苦手なんで……その方が女性は安心しますよね。先生はお元気ですか？」

高鳥が洒々^{しゃしゃあ}としてるので、野沢緑がくすくす笑った。

「いい加減なのね、高鳥君の超能力って」と、緑がいった。

「その方がいいだろう？ 覗^{のぞ}き魔だと誤解されたら、女性は口もきいてくれなくなる」

「いやね。まさか本当にやってるんじゃないでしょうね」

野沢緑は笑いこけた。目に高鳥への好意がある。好ましい異性へのごく自然な媚^{こび}があふれていた。二人が意外なほど親しいということがわかる。

いつの間に親しくなったのだろう、と杉村由紀はふと引っかかるものを覚えた。なぜかわからないが、気になったのだ。

三人はエレベーターのケージに乗った。高鳥は背が高い。女性にしては長身の由紀も、ハイヒールを穿^はいてさえ及ばなかった。百八十センチ以上ありそうである。

「高鳥君は背が高いのね」

と、野沢緑が感嘆をこめていった。

